だより

R6.7.19　Vol.16

1学期間　ありがとうございました！

校報にも書きましたが、おかげさまで無事、1学期を終えることができそうです。1学期は、ホームページの画像撮影もかねて、毎日教室を覗いていました。（先生方はさぞかし、嫌だったでしょう…苦笑）一緒に過ごしていて感じたのが、子供たちの元気の良さです。そして素直さです。校長室に聞こえてくる学習中の低学年の楽しそうな声、運動場に響く子供たちの歓声、教師の話をしっかり聞く態度。これまでの真穴教育（学校、家庭、地域の関わり、家庭、地域の教育力）の賜物だと思います。

ある日の賞状伝達の時(5年の楓芽君！飛行大会忠八賞でした！すごい！)「感謝」という話をしました。みんなが当たり前に毎日を送れているのは周りの人達のおかげだよ！そんな話でした。後日、たまたま私が道路沿いの草刈りをして、校門に戻ると、一年生の星那さんが「校長先生！何してたんですか？」「草刈りよ。」そう言うと「ふーん…あ！ありがとうございます」とそれを聞いた周りの子供たちも「ありがとうございます！」と次々に声をかけてくれました。私のした話が頭に残っていたのでしょうか。とてもありがたい気持ちになりました。「ありがとう！その一声でまた頑張れる！」そう返しました。この素敵な子供たちがさらに伸びていくよう頑張っていきたいと思います。1学期間、本当にありがとうございました！

四方山話真穴 ver.　其の十六（亡き友に思う）

四月下旬に同級生が亡くなりました。小中高と同じ学校で過ごし、特に小学生の頃は毎日のように数人の仲間で近くの空き地や神社の境内で遊ぶ間柄でした。彼女は頭脳明晰、スポーツ万能のまさにスーパーウーマンでした。就職後、東京で放送作家として活躍していました。癌を患っていました。一度は寛解し、10年以上が過ぎて、もう大丈夫だろうと思っていた矢先、再発したそうです。それから10年に及ぶ闘病生活。2年ほど前に、オンラインでおしゃべりする機会があり、カメラを通してですが、何十年ぶりかに再会しました。思っていたより元気そうに見えたのですが、再発した癌が増殖し続け、背中が曲がってしまい彼女曰く、「おばあさんのようになってるんよ。外に出るのも車いすがないと無理なんよ。…でも、八幡浜に帰って、やってみたいことがたくさんあるんよ。」そう生き生きと語る彼女から末期癌の患者であるということは微塵も感じませんでした。つながっていたSNS投稿の間隔が開き始め、『大丈夫なんだろうか？』と思っていました。「亡くなったんよ。あまり言わないでって言われてるんやけど、まあ雅人には言っとこうかと思って…」と5月下旬に友達から連絡をもらいました。『迷惑かな？』と思いながらも思い切って実家を訪ねると、お母さんと一時間ほど、話をすることができました。東京で茶毘に伏したそうです。誰に連絡したわけでもないのに、たくさんの人が集まってくれたと。「娘の知人に、『どれだけ生きたではなく、どう生きたかですから。』と言ってもらえて、ありがたいなと思うんやけど…雅人君がこんなに元気なのにね。うちの子も…。」そう語るお母さんの目は潤んでいました。帰り際「これね、新聞に掲載していたうちの子が書いていたコラムなんよ。良かったら読んで。」とA4、7枚ほどの連載記事をいただきました。再発のショック、闘病の不安、老いた親への想い、死への恐怖、生への希望、これからの生き方の模索、「それぞれの最終楽章～おひとりさま～」そんなタイトルでした。（さすが放送作家、私のコラムを表に出すのが恥ずかしくなるくらいの素晴らしい内容でした。）

本当にたくさんのことを考えさせられました。今日も明日も明後日も精一杯、子供たちと関わっていきたいと思います。考えるきっかけを与えてくれた亡き彼女に感謝です。近しい人が旅立ってしまう。少しずつそんな年齢になってきています。私が生きている限り、その人たちは私の中で生きています。教えてもらったことを次の人たちに伝えたい。そう思います。2学期、元気な子供たちに会えることを楽しみにしています。